
総 説

地域看護教育におけるケアリング教育

多 田 敏 子

徳島大学大学院ヘルスバイオサイエンス研究部地域看護学分野

要 旨 超高齢社会の中で、人々のケアに対するニーズが変化することが指摘されている。このような中で、ケアリングの研究は増加するとともに、コミュニティデザインも見直され、ケアリング・コミュニティという概念も生まれている。

このような状況で、今後、看護教育において、ケアリングを教育することが重要であり、ケアと関連したケアリングこそが、看護職ならではのケアリングであることを、事例を挙げて解説した。最後に、ケアリングによって、ケアするものとされるものが成長し合い、未知の社会的課題に対応することが期待されるという問題提起を行った。

キーワード：ケアリング，看護教育，地域看護

はじめに

これからの社会は、総人口が減少する中で、2050年に65歳以上人口39.6%ともいわれるように超高齢社会である。2013年7月に公表された「生活と支え合いに関する調査結果の概要」(国立社会保障・人口問題研究所, 2012)では、約2万人を対象に調査し、今後低所得者や一人暮らし高齢者が社会から孤立し、必要な支援が受けられなくなるのではないかと報告している¹⁾。そういった中で、人々は、既に社会の課題に気づき、それぞれの地域で、打開策を模索し始めているようにみえる。例えば、山崎ら²⁾は、年齢や職業を超えて人がつながるしくみをつくるコミュニティデザインを地域の人々と共に実践している。また、高橋ら³⁾は、ケアリング・コミュニティという概念を具現化している。ケアリング・コミュニティを、インフォーマル・サポートネットワークの強化を図るための活動が計画的に行われ、それがシステムとして機能している小地域と定義し、その地域特性を明らかにしている。強い郷土愛や活発な近所づきあいや相

互扶助が、ケアリング・コミュニティを形成する力になっていると報告している。このような地域の力は人々の生活を支える基盤としてこれからの社会に不可欠である。

一方、保健医療の視点から見た地域は、高齢化の進展により認知症などによる要支援者の増加が予測され、地域ケアを充実する方針が示されている(厚生労働省, 2013)⁴⁾。そういった中で、日野原⁵⁾は、いのちの延長ではなく日々の生活がその人らしく、健やかで、豊かであり、何よりも生きがいを感じられるものであることを医療は約束しなければならない、と述べている。すなわち、生活する場が地域であればよいのではなく、生きがいをもち最期まで人として生きていくことが目標であることを忘れてはならない。

これからは、看護師・保健師・助産師が、専門職として地域の人々の生活を支援する新たな地域看護を実践することが求められる。すべての看護職がより一層、地域看護に携わることになると考えられる。地域の人々と共に、専門職としてのケアリングを展開することが社会に期待されている。

2013年12月2日受付

2014年1月20日受理

別刷請求先：多田敏子，〒770-8503 徳島市蔵本町3丁目18-15
徳島大学大学院ヘルスバイオサイエンス研究部地域看護学分野

ケアリングの研究の動向

ケアリングの研究動向は、筒井⁶⁾、山内ら⁷⁾による詳細

な報告がある。また、それらに先立って、佐藤ら⁸⁾が、ケアリングの概念分析と今後の看護教育の方向性を検討する目的で、ケアリングの研究の動向を分析した報告がある。1983年から2002年の医学中央雑誌から「ケアリング」をキーワードに検索し、原著論文のみをまとめたものである。そこでは、ケアリングの定義に使用されているキーワードには「自己実現や成長」および「共感や気遣い、思いやり」の2種類あると紹介している。今回、同じ方法で2002年から2012年の間の論文を抽出した。さらに看護以外の領域の日本語論文数を参照するためにデータベース CINI から「ケアリング」をキーワードに論文数を算出した(表1)。CINI では、1999年以降には論文数が急増していた。1997年までは10編未満であったが、2000年には200件を超えていた。前述した筒井⁶⁾、山内ら⁷⁾の報告に見られるように国内外で、また看護以外の領域でもケアリングに焦点を当てた研究が活発になっていることがわかる。

表1 原著論文数の年次推移

単位:編

年	医中誌	CINI
1990	0	0
1991	1	0
1992	3	0
1993	4	2
1994	1	2
1995	2	3
1997	2	8
1999	3	146
2000	9	202
2001	3	198
2002	8	199
2003	11	214
2004	13	206
2005	10	195
2006	15	189
2007	13	173
2008	14	161
2009	12	176
2010	15	141
2011	18	179
2012	20	166

注:2001年までは文献番号8による(1996年および1998年の記載なし)。

2002年以降は文献8と同じ方法で検索した件数を追加した。

医中誌:医学中央雑誌

CINI: Citation Information by National Institute of Informatics

筒井⁶⁾、山内ら⁷⁾は国内外の文献検討から、ケアリングの定義の多様さを指摘している。さらに、患者と看護師との関係においてのみケアリングをとらえるのではなく、幅広く文化・組織・環境におけるケアリングの研究やケアリングの効果を研究する必要性についても言及している。

ケアリングの教育

ケアリングの定義は多様であっても、ケアリングが看護の本質である⁹⁾ということに異論を唱える人はいないと思われる。したがって、看護教育においては学生にどのようにケアリングを教育するかが重要な課題である。この課題については、安酸¹⁰⁾の見解を基に述べたい。安酸は、ケアリングの教育において、哲学的な観点で語られていることが多いが、哲学的観念を講義で教えるだけでなく、キュアの観点を外さず、キュアと融合したケアとしてとらえることができるように伝えることが重要であると述べている。つまり、ケアリング行為を裏付ける確かな知識や技術がなければケアリングは成立しないのである。言うまでもないことであるが、ケアリングは双方向の人間関係であり、行動を伴うものである。そうでなければ、お互いの成長をもたらすこともない。看護学生は実習場で患者(あるいは地域住民)の健康回復や増進を願って行動し、そのことによる相手の反応から、自分の知識や技術の未熟さに気づき、学習が動機づけられる。この体験は、看護職が生涯にわたって研鑽し続ける根底に流れるものでもある。

この視点こそが、看護専門職のケアリングであると考ええる。健康増進や回復に寄与するというキュアの観点がなければ、ケアリングは本来人間が持っている能力である¹¹⁾という前提のみから、友人や家族間等、身近な人とのかわりの中で行われること¹²⁾と同じようにしか理解されない。

ここでは、筆者が看護を学び始めた学生にケアリングを伝えるために用いる事例¹³⁾の一つを紹介したい。

勤務交代時の報告を聴いていたある夜のことで、準夜勤務の看護師が、赤みがかったブロンドの髪でそばかす顔のトレーシー・P・ツール(彼女は思春期のあらゆる問題でもがき、白血病と闘っていたが病状は不良であった)の検査データを見直していたとき、私はみぞおちに異常な感覚を感じたことを覚えています。トレー

シーを訪ねて来る人はめったにいませんでした。この夜、トレーシーと話したとき、彼女が母親に怒っていると感じ、母親がそばにいてあげることが急を要することだと私は第六感で感じました。トレーシーの許可を得て、「今夜、トレーシーにはあなたが必要です」と彼女の母親へ電話しました。そのとき母親はシングルマザーであり、小さい子どもが二人いて、病院から数時間かかる所に住んでいることを、知りました。

母親が病院に到着したとき、遠慮と沈黙が広がっていました。トレーシーのそばに座るように母親を促し、私は反対側に座ってトレーシーの腕をさすりました。その部屋を出て他の部屋を回り戻ってくると、P夫人(母親)はベッドの端に座り、睡魔と闘っていました。いっしょにベッドに横になってもよいか、私はトレーシーにやさしくたずねました。彼女はうなずきました。私たち三人はしばらくの間、ベッドへ横たわり、それから私は部屋を出ました。後程、戻ってきたらトレーシーは母親の腕に包まれていました。目と目が合ったとき、「娘はなくなりました」そして「どうぞ、まだ娘を連れていけないでください」と母親はつぶやきました。

私は部屋を出て、後ろ向きで静かにドアを閉めました。それから、そっと部屋に戻ったのがちょうど6時で、早朝の光が窓から射し込んでいました。「P夫人」と私は腕をのびし、母親の腕に触れました。母親は涙が筋になった顔をあげ、私を見ました。私は「時間ですよ」と告げて待ちました。準備が整ったとき、ベッドから離れるのを手伝い、しばらく母親を抱きました。私たちはいっしょになって泣きました。

「ありがとう、看護師さん」と目をみながら、私の手を両手で強く握りました。そして母親は向きを変え、歩いていきました。涙は私の頬を流れ続け、母親の後を追ってドアの所へいき、母親がホールから消えていくのを見守りました。

Gayle Maxwell (1990)

この事例は、看護師が語ったケアリング体験である。ここでは、看護師が、思春期の女性の心身の発達上の特性の理解に基づき、白血病であることの意味、病状が不良であること、検査データなどの適切な判断のもとにケアリングの場面がもたらされたことが記述されている。看護師間の情報交換や普段のケアを通してとらえている感覚的な内容(直観)も含まれていると推察されるが、患者のニーズを適切に把握し、しかもその対応は急を要

する状態にあると判断することができている。このようなケアの部分が適切であるからこそ、患者や母親への観察やアセスメント(下線部)につながり、患者や母親、そして看護師の成長をもたらすケア(二重下線)になっている。電話でのやり取りから得た母親の生活に関する情報をもとに、母親が疲れ果てている状態を思いやりのまなざしで観察している。母親と思春期の娘である患者の間にある遠慮と沈黙の状況をアセスメントして、患者(娘)と母親のニーズをくみ取り、自然な流れで母と娘の関係修復につなげている。ここで重要なのは、看護師は、患者(娘)からの要望があったから家族(母親)を呼んだわけではない。患者のニーズに気づき、適切な時期に実行することの重要性が、この看護師の体験の中には示されている。そして、娘のところに来たもののそれまでの関係の中にあつた気まずさからどのように娘に近づいていけばよいか戸惑う母親の様子を観察し、「いっしょにベッドに横になってもよいか」と患者(娘)に声をかけ、三人でベッドに横たわるという場を作り出している。母親の腕に抱かれて穏やかに最期を迎えることは、それまでの患者には期待すらできなかったことではなかったかと思われる。しかし、夜中から亡くなる明け方までの僅かな時間に、不安や恐れを抱きながら孤独に死に向かわざるを得なかった患者が、一人の看護師の行動によって、心安らかに最期を迎えることができたのである。そして、最後に母親が「ありがとう、看護師さん」と言って看護師の両手を力強く握りしめたという記述は、娘の安らかな死を看取る場がもたらされたことによって、母親が娘の死という悲しみを受け止め、幼い二人の子どものもとへ帰っていく力を得たことを示唆している。

このように、専門的な知識や技術を有する看護職であるからこそできるケアリングに学生は気づき、特に初学者である看護学生が学習へのモチベーションを高めるのに適した事例であると考えている。このような場面は、医療機関の中だけに見られるものではなく、多くの高齢者が最期を迎えることが予測される超高齢社会の中で、地域の中でも起こり得ることである。

鎌野¹⁴⁾は、家庭科の学習においてケアリング教育を導入することを提案している。日常生活の中でケアし、ケアされることを体験し、人との関係性を育むことの重要性を提言している。このような体験を有する学生が、さらに看護職としてのケアリングを学ぶことができれば、ケアリングの相互作用からの学びがより一層深まることが期待できる。

しかし、ケアリングは相互作用の中で体験的に学ぶものである¹⁵⁾という前提に立つならば、ケアリングの教育は授業や実習の場だけでなく、教師とのかかわりにおいても学生がケアリングを学んでいることを忘れてはならない。

結 論

われわれはいたるところでケアリングの場を体験しているといっても過言ではない¹⁶⁾。生活習慣病を抱えながらの就業、虐待やいじめのように身近な者による傷害等、枚挙にいとまがない。広井¹⁷⁾が指摘するように、これからの社会では人々のニーズは多様化し、生活モデルへの転換が必須の時代である。人々の生活の場で、専門家だけでなくすべての人々が相互に支え合う意識が育まなければならない。しかし、長期にわたるケアや、日常生活の場で行われるケアは、ケアを提供する人にも、ケアを受ける人にも変化をもたらすことが指摘されている^{18,19)}。ケアする側の自己満足ではなく、ケアされる側の自立心や自尊心を傷つけず、人間としての尊厳を保ちたいという願いに応えなければならない。ケアに関連した倫理的問題も指摘^{12,20-22)}されている。「自己犠牲」²⁰⁾としてのケアではなく、相手に責任を持ち質的に安定したケアを実施することが求められる。森村²⁰⁾は、ケアされることによって、人は自分の存在の意味を自覚し、自分にとっての価値や理想を選択するという自己決定ができるようになる」と述べている。したがって、ケアを女性だけの問題や特定の職業だけの問題にするのではなく、人と人との支え合いとして生活の中でケアリングの関係を築くことが大切になる。このことが、地域の人々と共に、専門職としてのケアリングを展開することである。

そういった中で、ケアリングによって、ケアするものとされるものが成長し合い、未知の社会的課題に対応することが期待される。

謝 辞

最後に、このような機会を与えていただきました本誌編集委員長である雄西智恵美先生に感謝いたします。また、看護学教育において共に歩んできた学生諸子並びに支えていただきました教職員の皆様に深く感謝いたします。

文 献

- 1) 国立社会保障・人口問題研究所：2012年社会保障・人口問題基本調査，生活と支え合いに関する調査，<http://www.ipss.go.jp/ss-seikatsu/j/2012/seikatsu2012summary.pdf>，2013.07.24アクセス可能。
- 2) 山崎亮：コミュニティデザイナー人がつながるしくみをつくる－，学芸出版，8-83，2011。
- 3) 高橋信幸，浜崎裕子，花城暢一 他：離島・過疎地域におけるケアリング・コミュニティ形成に関する研究（その1）－長崎県西海市崎戸地区におけるインフォーマルサポートの活性化に向けて－，長崎国際大学論叢，第6巻，143-152，2006。
- 4) 厚生労働省：地域包括ケアシステム，http://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/hukushi_kaigo/kaigo_koureisha/chiiki-houkatsu/，2013.11.01アクセス可能。
- 5) 日野原重明，川島みどり，石飛幸三：看護の時代，17，日本看護協会出版会，2012。
- 6) 筒井真優美：看護学におけるケアリングの現在－概説と展望－，看護研究，44（2），115-128，2011。
- 7) 山内朋子，筒井真優美：ケアリング研究動向，看護研究，44（2），129-148，2011。
- 8) 佐藤幸子，井上京子，新野美紀 他：看護におけるケアリング概念の検討－わが国におけるケアリングに関する研究の分析から－，Yamagata Journal of Health Science，7，41-48，2004。
- 9) 操華子，羽山由美子，菱沼典子 他：ケア/ケアリング概念の分析－質的・量的研究から導き出された諸属性の構造－，聖路加看護大学紀要，22，14-28，1996。
- 10) 安酸史子：ケアリングをいかにして教育するか，看護研究，44（2），172-180，2011。
- 11) Milton, M.: On caring, 1971, 田村真, 向野宣之訳, ケアの本質－生きることの意味, 87-90, ゆみる出版, 2003。
- 12) 泉澤真：ケアリングは看護の何なのか－テクノロジー－時代におけるケアの倫理と看護－，北海道文教大学研究紀要，(33)，1-10，2009。
- 13) Boykin, A. & Schoenhofer, S. O.: A model for transforming practice, 2001, 多田敏子, 谷岡哲也監訳, ケアリングとしての看護－新しい実践のためのモデル－, 37-38, 西日本法規出版, 2005。

- 14) 鎌野育代：家庭科における「ケアリング」の教育実践の検討，千葉大学教育学部研究紀要，62，227-232，2013.
- 15) Noddings, N.: A feminine approach to ethics and moral education, 1984, 立山善康, 林泰成, 清水重樹 他訳, ケアリング—倫理と道徳の教育—女性の観点から—, 11-12, 晃洋書房, 1997.
- 16) 村嶋幸代, 田口敦子, 永田智子 他：24時間365日安心して暮らし続けられる地域に向けて—看護がすすめる地域包括ケア—, 6, 木星舎, 2012.
- 17) 広井良典：ケアを問いなおす—深層の時間と高齢化社会—, 107-110, 三松堂印刷, 1997.
- 18) 渡辺俊之：ケアの心理—癒しとささえのころをさがして—, 175-187, KK ベストセラーズ, 2001.
- 19) 瀧澤利行：生きる力を高める在宅ケアの思想と課題, 日本在宅ケア学会誌, 17 (1), 5-10, 2013.
- 20) 森村修：ケアの倫理, 大修館書店, 88-92, 2000.
- 21) Kuhse, H.: Caring —nurses, women and ethics Helga Kuhse—, 1997, 竹内徹, 村上弥生監訳, ケアリング—看護婦・女性・倫理—, 114, メディカ出版, 2000.
- 22) 瀧澤利行：ケアの実践・研究と倫理的課題, 日本在宅ケア学会誌, 11 (2), 3-11, 2008.

Issues of caring education in community nursing education

Toshiko Tada

*Department of community nursing, school of health sciences,
institute of health biosciences, the University of Tokushima graduate school, Tokushima, Japan*

Abstract In a super-aged society, changes in people's need for care have been pointed out. This kind of situation has led to an increase in the number of research papers on caring, and to reviews of community designs. Further, it has created the concept of "caring community".

Against this background, this paper refers to actual cases to show that it is important to teach caring in nursing education, and that caring associated with cure is the caring essential for nursing professionals. Lastly, we raise the point that people who conduct caring and those who receive it are expected to grow up, and unknown social issues together.

Key words : caring, nursing education, community nursing